
オレがこの世界の救世主！？

MMM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレがこの世界の救世主！？

【Nコード】

N9666X

【作者名】

MMM

【あらすじ】

人類がESP（超能力）を用いるようになり2000年。皇歴2300年、日本の南極調査団が地中深くに洞窟を発見した。南極調査団が調査した洞窟は、魔界に続く洞窟だった。地球と魔界の平和を維持するために威玖摩健たちの物語が幕を開ける。

epilogue

人類がESP（超能力）を用いるようになり2000年。

皇歴2300年、日本の南極調査団が地中深くに洞窟を発見した。

南極調査団が調査した洞窟は、魔界に続く洞窟だった。

人類にとって魔界^{そと}は未知の世界。

この発見を皮切りに南極大陸を我が領土にしようと領有権をかけて各国は戦争を勃発させた。

その戦争の被害は魔界にも広がってしまいその戦争の影響はいつしか魔界人と人間との戦争まで発展し、第一次人魔大戦と呼ばれる戦争となった。

ESPを用いて戦う人類の圧倒的勝利を確信していた各連合国家群首脳はこの確信はもろくも崩れ去る。

魔界人は人類にとって未知なる力、通称『魔法』を巧みに使い戦線の拡大を図ってきたのだ。

そして大戦末期、双方の首脳陣が集まり話し合いの結果、何とか停戦した。

地球、魔界間における第一次大戦停戦条約

1・双方賠償金はなし。

2・戦犯は各国家ごとが独自に裁判にかける。（合同法廷は開かない）

3・魔界側の地球侵攻時の占領地を無条件で放棄する。

4・しかし、占領地でオーストラリア南部の『メルボルン』においては上記2

の限りではなく、ここに大使館を置くものとする。

5・地球側の魔界侵攻時の占領地を無条件で放棄する。

6・しかし、占領地でアベンエズラ市においては上記5の限りではなく、ここに

に大使館を置くものとする。

7・南極全域を中立地帯とするが双方同数の拠点を置くことを認める。

8・技術的に先進である地球側の製品を魔界で販売する場合は関税を設けるものとする。

9・上記8においての関税について決定権は地球側にあるものとし、魔界側は

反対する権利を有さない。

我々はここに当条約が有効であるものを証明する。

地球全人類のために。

地球全権・国際連盟事務総長 ジェファソン・クリス

魔界全人類のために。

魔界全権・五大魔道術連盟盟主 ジース・ブラック

それから、5年後再び戦争が起こってしまった。

第二次人魔大戦・・・この戦争のきっかけは、魔界人の一般市民の小さな不満から始まった。

停戦条件に不満をもっている魔界人が徐々に増え、一部が暴徒と化し政府関係施設を包囲、魔界政府は崩壊、民衆を中心とした五大魔道術連盟の教えを受ける国家が誕生した。

新・魔界政府は地球各国政府に対し停戦条約の撤廃並びに宣戦を布告し、ここに第二次人魔大戦が開戦されたのだった。

宣戦布告と同時に南極より侵攻してきた魔界軍はオーストラリアを始め東南アジア諸国を占領し東南アジア及びオセアニア連合は壊滅

的打撃を受けた。

人間側は占領地を奪還するために『オペレーション・リベレーション』を敢行。

4 か月における激戦の末これを奪還した。

4 か月の激戦の末敗れた魔界軍は魔界からの支援を得るための補給ラインの崩壊という憂き目にあってしまう。

補給ラインの切断に成功した地球軍は魔界軍の先発隊を包囲し、これを壊滅させた。

先発隊を失った魔界軍は戦場を自らのホームである魔界へと移し徹底抗戦の構えをしめた。

『オペレーション・リベレーション』を成功させ、魔界軍先発隊を壊滅させ勢いに乗った地球軍はその勢いのままに部隊を展開。

アメリカ合衆国、大英帝国を中心とした還大西洋連合軍は主力部隊を魔界へと送り込む。

しかし、不慣れな土地や魔界軍のゲリラ作戦により部隊の8割を損失し、還大西洋連合軍主力部隊は壊滅。

還大西洋連合軍主力部隊壊滅の報を受けた各連合国家軍は急きょ、国連の管轄を離脱、ESPの創始者たちで構成された『開祖四家会』に指揮権を譲渡した。

開祖四家会は展開中のユーラシア連邦軍を残存する還大西洋連合軍兵救出のため魔界へ派遣、東アジア連合軍を南極の警備にあたらせた。

残存兵救出ミッションに成功したユーラシア軍はその6割の兵力を損失し、地球側の残存戦力は事実上、日本、韓国、中国を主軸とした東アジア連合軍及び、フランス、ドイツ、イタリアを主力とした欧州同盟軍を残すのみとなった。

しかしダメージを負ったのは何も地球側だけではない。

この時点で魔界側の戦力は当初の7割を損失しており、この時点での戦力差は地球：魔界で100万：84万の開きが見えていた。

その後、一進一退の攻防を繰り返し、第二次人魔大戦が始まってか

ら4年の歳月が流れた。
開戦より4年目の第六次南極海海戦で両軍の最高指揮官が戦死。
戦争のこれ以上の継続は無意味と判断し数回に渡る会談の末、終戦
を迎えるに到った。

地球、魔界間における第二次大戦終戦条約

- 1・双方賠償金はなし。
- 2・戦犯は合同法廷を開廷し双方の司法官によりこれを裁くものとする。
- 3・魔界側の地球侵攻時の占領地を無条件で放棄する。
- 4・しかし、占領地でオーストラリア南部の『メルボルン』においては上記2
の限りではなく、ここに大使館を置くものとする。
- 5・地球側の魔界侵攻時の占領地を無条件で放棄する。
- 6・しかし、占領地でアベンエズラ市においては上記5の限りでは
なく、ここ
に大使館を置くものとする。
- 7・南極全域を中立地帯とするが双方同数の拠点を置くことを認める。
- 8・双方の交流をより発展させるために関税及び領事裁判権はここに
平等である
ることを定める。
- 9・人材の交流促進のため、『日本国』にこの主要施設を設けるもの
とし、施設
職員の人事は双方の独断ではこれを行うことができない。

我々はここに当条約が有効であるものを証明する。
地球全人類のために。

地球代表・開祖四家会会長 北神 源之介

魔界全人類のために。

魔界全権・五大魔道術連盟盟主 ジース・ブラック

第二次人魔界大戦が終戦してから20年の歳月が流れた。

> i 3 4 6 8 3 — 4 3 8 9 <

epilogue (後書き)

若干厨二病を患っている下手の横好きが書いた小説です。
以後の創作のためにも評価のほどよろしく願います。
誤字脱字等ありましたらスイマセンorz”。

Stage 1 - 1 出会い

第二次人魔界大戦が終戦してから20年の間に新しい組織が作られた。

地球と魔界の信頼関係の証と平和維持を目的としそして、もう二度とあのような戦争を引き起こさない様に創設されたのが『独立治安維持軍』である。

独立治安維持軍の総司令部は日本に置かれ、諜報・情報班、参謀部はここにしかない。

独立治安維持軍はトップに総司令官を置いているトップダウン方式の組織体系をとっており、その下に参謀部がある。さらに参謀部の下には

『諜報・情報班』を置いて組織内外の情報を統括している。作戦指揮権は諜報・情報班班長に委託されている。

『諜報・情報班』の主な任務は、情報処理機器、ESPを用いた情報収集及び敵対組織への潜入、破壊工作などで、ここで得られた情報をもとに諜報・情報班班長は作戦を立案し各班に指令を下す。

ちなみに、諜報・情報班は日本の独立治安維持軍総司令部にしか配置されておらず、各支部の作戦立案のために、ここから各支部司令部に、数名程度が派遣されている場合が多い。

諜報・情報班の下に各実行部隊が配置され、

『強襲班』 『狙撃班』 『尋問班』 『操縦班』 『通信班』 『衛生班』

『救護班』 『警備班』がある。

『強襲班』の主な任務は、拳銃、刀剣、その他の武器やESPを用いた近接戦による前衛班で反勢力に対する実行部隊の役割を担っている。

諜報・情報班と並び班員の死亡率が他の班に比べて高いのも特徴の一つだ。

『狙撃班』の主な任務は、狙撃銃及びESPを使用した遠隔からの

戦闘支援で、強襲班との連携を重要視されている。

『尋問班』の主な任務は、捕虜にした敵兵への尋問で、ここで得られた情報は一律諜報・情報班へと伝えられる。そこでその真偽が問われ、作戦の立案の重要な情報源となっている。

『操縦班』の主な任務は、車輛・船舶・航空機の運転操縦で、強襲班や、狙撃班、衛生班といった実行部隊を現地へ輸送したり、補給物資の輸送や航空機による上空監視を主な任務としている。

『通信班』の主な任務は、通信機器を用いた情報連絡によるバックアップで、司令部に部屋を構え実行部隊のバックアップを行っている。また、通信員として、数人を現地へ派遣し通信の補助も行っている。

『衛生班』の主な任務は、戦場に於ける医療・救助活動で戦地で負傷した人間の応急処置を行っている。

『救護班』の主な任務は、基地にある軍病院で負傷して搬送された兵士などの本格的な治療を行っている。

『警備班』の主な任務は、地球と魔界の警備を担当しており、一般人に一番近い維持軍の班となっている。一般的には警察の仕事の肩代わりをしている節があり、班員の士気は他の班人に比べると低い。

2333年、この軍に所属している2人の少年が規定訓練である野外戦闘訓練へ行くため準備をしていた。一人は短髪で赤みがかった黒髪、容姿は世間一般的に中の上といったところだろう。その少年の後ろでバックに詰めた荷物を確認している少年は長髪の黒髪を後ろで縛った格好をしており、その手にはタクティカルナイフが握られていた。

「護、準備は終わったのか？」

「準備出来たぞ、兄貴」

護と呼ばれた長髪の黒髪を後ろで縛った格好の少年はそう答えると手に持っていたナイフをクルリとペン回しの要領で回転させそのまま足首の鞘にしまう。

「お前は班の下っ端なんだから、遅刻は許されないぞ」健は自分のバックを肩から下げながら双子の弟に言った。

鏡で自分の姿を確認した健は机の上に置いている写真立てに眼を向ける。

「親父、行ってくる」

元・東アジア連合空軍大佐だった父親、大樹の遺影に手を合わせ、自分の部屋からでていった。

リビングにはすでに装備品を身に付けた護が壁に背中を預け待っていた。

二人の視線が合う。

「それじゃ行くか」

健はそう言っていると、自分の荷物を持ち直し部屋から出ていき、護もこれに続いた。

部屋を後にし、基地の兵舎を出て、集合場所である第三格納庫へ向かい二人は歩いた。

兵舎は基地の北側に位置しており基地の南方にある格納庫群に行くためには滑走路を横切り、基地司令部を過ぎなければならなかった。まあ大丈夫だろうと思った二人は運悪く管制塔にバレてしまう。

その責任者に呼び止められてしまったが、事情を説明し許してもらい基地司令部の方は難なく通りすぎる、集合場所に着くと、すでに強襲班のメンバーは集まっていた。

強襲班は通称『制裁者』^{シュトラッフェ}と呼ばれている。

「おはようございます」

「健、護、遅いぞ。」

強襲班の班長橋本焦は少し眉にしわを寄せて二人に注意した。

「集合時間に遅れたわけではありません」

護は橋本班長にかみつく。

時刻は8:50、集合時間の9:00より10分早い。

「護、班長の冗談だ。」

健は護をさとし、護は周囲を見渡した。

皆は笑いを堪えていた。

「整列。馬鹿はほっておくぞ。今回の演習は二班に分けての模擬戦闘を行う。班は俺の独断で決めておいた。反論は許さんぞ。それじや発表する」

班長は右手でバインダーを持ち帽子をかぶりなおした。

「第一部隊班長、橋本焦、以下

結城絵梨奈、

新田絵里、

湯崎魁、

加賀見隆、

豪炎寺隼人、

(ごうえんじはやと) 赤月廉、

上澤光一、

長谷川唯、

阪井裕也

第二部隊班長、威玖摩健、以下

威玖摩護、

巳波零菜、

美翔舞、

霧

野スバル、月影友里、

海堂駿、

杉崎望、

生島聖智、

沖野五月

以上二つの部隊で模擬戦闘をしてもらう。指定範囲は半径80km以内。

自分の部隊員全員がやられるか、班長がやられたらその時点で終了だ。

開始は10:00を予定、スタートの合図は銃声だ。聞き逃すなよ」上官からの説明と班分けが終わり、第二部隊班長に選抜された健は、第二部隊員に招集をかけた。

「これより野戦演習場に向かう。総員、輸送車に搭乗しろ」

第二部隊員は順次輸送車に乗り込み、全員の搭乗を確認すると車は動き出した。

輸送車に揺られながら五分ほど、護が静けさに耐え切れず、隣の美翔舞と巳波怜奈に話しかけた。

「自己紹介がまだだったよな。俺の名前は威玖摩護。よろしくな」

「なっ、なんですか急に」美翔は驚き後ずさった。

護はニツと笑い、「まあ暇だったし暇つぶしにお喋りでもしようと思っ」

と、右手を軽く上げて答える。

「私は舞、美翔舞よ。こちらこそよろしく」

舞は顔をそむけつつ答えた。

「美翔あんた結構かわいいしスタイルもいいな」

「なつ、ふん！」

美翔は頬を紅潮させ眼を見開き、バツと護の方を向く。

護は手をひらひらとさせて舞に答えた。

その姿を見た舞は恥ずかしそうに窓に顔を向けた。

健は護に倣い自己紹介をする。

「今回第二部隊班長を務めることになった護の双子の兄の威玖摩健です。よろしく」

ニコツと笑い「私は巳波怜菜です、お互い頑張りましょう」

健は素朴な疑問を巳波になげかけた。

「なんで巳波は強襲班に入ったんだ？」

「わたしは実家の言いつけで・・・」

「実家の言いつけ？」

「すいませんが・・・」

「ああ、すまん。深入りしすぎた」

「自己紹介も終わったみたいだし、・・・・ん？そろそろ着くぞ」

健は輸送車の窓から外の風景を見るとそこは既に見慣れない森林の中だった。

目的地に着き輸送車は止まる。窓から見た景色は、一層と生い茂った森林だ。

諜報・情報班班員の監督者は司令塔から健の無線に連絡をいれた。

「第二部隊は輸送車から降りろ」

健は指示に従い最初に輸送車から降りる。

降りると、風が吹き森林は葉と葉が擦れあつた音が聞こえた。

運転手から渡された地図を広げ、地形を確認する。

自分たちが降りた場所は演習場の南に位置する森。

北東から南西にかけて演習場を横切る川が流れていた。

川を挟んで北には標高数百メートルの山がそびえ立ち、演習場を見渡すにはうってつけに思われた。

川のこつち側、つまり自分らが降りた森の東側には小高い丘が聳え

立っていてその丘の頂上には司令部のマークが描かれていた。
おそらく北の山に第一部隊は陣を張るのが妥当なため、そうするだろう。

そうになると、こっちは不利になるが、丘に拠点を置くつもりでいたが叶わないらしい。

無線で連絡が入る。

「第一部隊が配置に着き次第、銃を撃つ」

今の声は監督者のものだった。まだ第一部隊は配置に着いていないらしい。

健は今のうちにと輸送車の中で立てた作戦の配置通り右翼班には生島聖智、沖野五月と左翼班には巳波零菜、美翔舞、中央班には威玖摩健、威玖摩護を配置し前衛班には霧野スバル、月影友里、海棠駿、杉崎望の四人を配置した。

第二部隊が輸送車から降り、十分後、運転手は監督者に連絡を入れた。

「こちら輸送車、まもなく第一部隊投下ポイントに到着します」

「こちら司令部、了解。第一部隊を降ろし次第、再度連絡せよ」

「了解」

通信から二分後第一部隊は輸送車を降りた。

第一部隊は降りたポイントから北に数キロ歩き、山の頂上付近に着く。

岩陰にしゃがみこみ班長の周囲に集まる。

「ここに陣を引くぞ」

班長はそう言うと、背負っていた旗を地面に突き刺す。

陣を張り終わると、班長は司令部に連絡を入れた。

「こちら第一部隊配置につきました」

「こちら司令部、了解。合図を待て」

「了解」

班長はそう言うと通信機をとじた。

……それから数分後、小高い丘の方から銃声の音が響いた。

訓練は始まりそれぞれの班長が班員に指示を下していく。

健は指示を出す。

「前衛班の霧野と杉崎は木をつたって索敵をしてくれ、分かり次第無線で報告。使用周波数は1558kHzだ」

「了解」

橋本班長も指示をだしていく。

「新田、湯崎、加賀見、は索敵にまわれ。ほかの奴は指示があるまで現状維持」

最初はどちらも様子見で静かな均衡が保たれている状況だった。

先に動いたのは第二部隊のほうだった

杉崎から連絡が入る。

「こちら杉崎。第一部隊を目視。対象は今現在動きなし、見た感じでは班長の周りには人がいません。おそらく岩陰にでも隠れている模様かと思いますが、どうしますか？」

建は頭を抱え、考え込んだ後

「月影と海堂はすぐに向かってくれ」と、指示を下した。

「了解」

「霧野と杉崎は現状待機。二人が到着次第奇襲をかけてくれ」

「了解」

健の指示に杉崎は頷く。

月影と海堂は健の指示に従い、無線で連絡を取り合い杉崎達の元へ向かった。が、援護に向かっている途中、突然第一部隊の三人と出くわしてしまい、銃撃戦が始まった

戦闘状態に入った月影から連絡を受けた杉崎はすぐに班長に無線を入れる。

健のもとに月影及び海堂の戦闘開始の報が届いたのは戦闘開始1分後のことだった。

月影、海堂と第一部隊三人の戦闘は当初は単なる拳銃の撃ち合いだ

けの攻撃であつた。

救援が到着しない苛立ちと、一見無意味な銃撃にこれでは埒があかないなと思ひ海堂は月影に『正面突破、援護せよ』のハンドサインをおくる。

月影の『了解』のサインを確認した海堂は月影の援護射撃を受けて思ひ切つて正面突進を試みた。月影は彼の援護し

「男つて大胆な行動に出るんだから、もう」

と心の中で呟いた。

一見捨て身の正面突破を試みた海堂ではあるが、彼は先程の銃撃戦で大まかな地形や相手の位置を把握していたのであつた。

そして、真先に向かつて行つたのは新田のところであつた。

「くっそ」

新田は海堂の特攻に驚き、加賀見と湯崎は彼女の援護へ向かうとしたのだが、月影の援護射撃に邪魔をされて進路を阻まれてしまう。援軍の来ない新田は海堂の奇襲に倒されてしまう。海堂はその勢いのまま湯崎の方に向かう。しかし加賀美の反撃に振り返りにあい海堂はペイント弾を受ける。今の一連の行動に湯崎は加賀美の援護のため飛び出した瞬間、月影の射撃に倒されてしまう。海堂は加賀美の突然の反撃に対応できず倒されてしまい、残りは月影と加賀美だけとなつてしまう。二人はそれぞれ木の陰と、岩陰に身を潜め相手の出方を覗つた。先に動いたのは加賀美だつた。加賀美は岩陰から木の陰の上にある稗栗を撃ち落とし、月影の行動を誘つた。月影は右に転がり岩陰から見えていた加賀美の顔を目掛けてトリガーを引く。この攻撃をしゃがんで避け、またもや単なる撃ち合いに戻つてしまった。

まるで千日手のような現状に耐えかねた加賀美が月影に提案をする。「こんな状況になつても埒があかねえ…ここはいつちよう勝負でもしないか？」

誘いをかけてきた

「？」

「よく聞いておけ、得物はハンドガンだ。弾数は一発、カウントがゼロになったときに出了とこ勝負。これでどうだ？」

「フツ、おもしろそうね。それで、カウントダウンはどうするの」

「一緒にカウントダウンすりゃあいい」

二人の眼が輝く。

月影は右手で銃を持ち直すと小さく一つ呼吸を入れる。

「3・・・、2・・・、1・・・0！」

お互い出てきて撃ちあった。

その頃、合流予定の二人が戦闘状態に入ってしまったため、先に第一部隊へ奇襲攻撃を仕掛けるように指示を受けた霧野と杉崎は、健の指示通りに奇襲をかけ、対応が遅れた手近な敵二人をあっさりと倒していた。

しかし、周りに散らばっていた敵がすぐに集まり、なかなか本隊へ帰還することができずにいた。

気が付けば敵に包囲されてしまい、成す術のない二人はあっさり投降してしまった。

「まあ、当然っちゃあ、当然だな」

と二人は笑い、捕虜になる前に健に連絡をいれ、武装を解除し大人しく投降する。

月影と加賀見は、お互い放った弾がお互いの腹付近に当たり相打ちに終わってしまった。

「おまえ、なかなかやるな」

「あなたこそ」

二人は自分の服に着いたペイントに眼を落し讚えあった。

月影は「第一部隊先遣班三名との戦闘は相打ちに終わりました」と健に連絡を入れる。

両部隊班長はほぼ同時に連絡を受け、両部隊班長は最後の勝負に出

ることを決心した。

健は「右翼班、左翼班は中央班に合流しろ。これより第一部隊に総攻撃をかける。おそらく相手の方も総攻撃をかけてくるだろう。決戦の場は川の真ん中あたりだろうな、心からしてかかれ」と、指示を下し移動を開始した。

橋本班長は、今の連絡を受け第一部隊員に集合をかける。

「全員集合、これより第二部隊に総攻撃をかける。おそらくあいつらも総攻撃をかけてくると思われる。『決戦の場はおそらく川の真ん中あたりだろう』などと考えているはずだ。我々はこれに対して奇襲をかける。心からしてかかれ、いいな」

全員縦に首を振り、川に向かって進軍した。

数十分後、第二部隊は川につき第一部隊の到着を待った。第二部隊は銃を構え臨戦態勢をとっている。

橋本班長の読み通り第一部隊は川を見下ろせる高台に陣を敷き奇襲をかけた。

第一部隊の奇襲に臨戦態勢で臨んでいた第二部隊は応戦に成功する。高台からの奇襲を受けたため被害が皆無といえバウソになるが二、三人の脱落で踏みとどまっていた。

身を隠すことができない場所での銃撃戦にもかかわらず一向に結末が見えないでいた。

要するに、撃ちあっているだけで何も進行せず難航していたのだ。キリがないと思った橋本班長は健に対して連絡をとる。

「お互いこんな事をしてもきりがない。そこでだ、班長どうしサシの決闘といこうじゃあねえか」

『えっ！………わかりました』

「言わなくても分るよな？」

『先に倒れたら負けですすよね』

「それじゃ、やろつか。ああ、いいわすれるとこだったが援

護とか武器の持ち込みなしな」

『言われなくても、そのくらい・・・』

我が意を得たりとほくそ笑む橋本班長は、「撃ち方やめ」と、大声で命令した。

同時に第二班の銃声が消えたのは健が指示したからだろう。

お互い準備が終わり、川の中央に進み身を構える。

そして、開始の銃声が鳴り響いた。

最初は間合いを取り、出方を見ていたのだったが先に動いたのは橋本班長の方だった。

間合いを詰め右ストレートと見せかけ大きく右に体を捻つての左アッパーだった。

健は右ストレートに対しての防御姿勢を取ったため左アッパーを食らってしまい、その場に蹲ってしまった。

橋本班長のパンチ力は半端なものではないと、体感し「もう一発もらうとやばいな」と思って間合いを取った。

健は走りだし勢い良く鳩尾向けて殴り込むが橋本班長の左手にあっさり止められてしまう。反撃を避けるため左足で班長を蹴りもう一度間合いを取る。

次は姿勢を低くし勢い良く前に突き進む。それを見た橋本班長は真正面から受けて立とうと姿勢を低く前へ走り出した。

橋本班長の予測とは違い、健は左に逸れて橋本班長の右足を引っかけける。バランスを失い前に転げた橋本班長の脇腹めがけて蹴りこむが、橋本班長は反応し、振り上げた足をつかみ、軸足を蹴りその反動で起き上がる。思いもよらぬ反撃を受けた健は仰向けに倒れてしまい、橋本班長に馬乗り組み伏せられてしまった。橋本班長はその所謂マウントポジションのまま健の顔めがけて、拳をふるう。橋本班長のパンチは重たく健の意識が飛びかけた。

健は班長の息継ぎのタイミングを見計らい班長の背中に蹴り入れ、少し前かがみになった顎をめがけて殴る。橋本班長が怯んだ隙に間からはい出てきてなんとかパンチの猛攻は逃れるが、荒い息をして

いた。

それを遠目に見ていた第二部隊員である美翔舞は止めに入ろうするが護に止められてしまう。護は真剣な眼差しで彼女を見て首を横に振る。

「はなして、はなしてよ！」

舞は叫び、護の手を振り払う。

「もう、見てられない」

舞の悲鳴にも似た叫びが会場に響いた。

舞はそう言つとその場に崩れ落ちる。護はそんな舞に声をかけようとしたが

「私が別の場所に移します」

と零菜に制されてしまう。

「でも…」

「彼女が出ていなければ私も同じことをしていたかもしれません」

「…わかったよ」

零菜は舞に肩を貸し少し離れた場所に移動した。

第一部隊の一員である、結城も同じことをしようとしたが、豪炎寺に止められてしまい

「もう、見てられない」

と、その場にうずくまり手で顔を隠してしまっていた。

健は意識が朦朧としながらも最後の力振り絞り橋本班長に挑む。

橋本班長の渾身の右ストレートをもろに受けてしまい、健は完全に意識を失ってしまう。

橋本班長は目の前で倒れてきた健を胸で受け止め、疲労した体に鞭を打つと倒れて動かない健の体を左腕で支えなおす。

「お前はよく頑張ったよ」

と、健には聞こえない声で呟いた。

お互いの部隊員は顔を見合わせてため息をつく。

そんな中、

「やっと終わったか。まったくヒヤヒヤしたぜ。橋本さん、あんた

手加減していただろ？」

と、上澤が聞いた。

「当たり前だろ？なんせオレは『グレート・メツェライ灼熱の虐殺者』なんだから」
班長は笑って答えた。

豪炎寺は優しく絵梨奈の肩に手を乗せ

「もう、勝負は終わったからさ」

と囁いた。

「……ホントに？」

と涙目で絵梨奈は豪炎寺を見あげた

「周りを見るよ」

「どうなったの？」

「健は班長のストリートをもらって絶賛気絶中、橋本班長はなんともないぜ」

結城は再び泣きながら

「本当に、よかった」

「タオル…貸してやるからさ、顔洗え。せつかくの可愛い顔が台無しだ」

「もう、余計なことを言わないで!!」

豪炎寺のちよつとした一言に絵梨奈は怒った。

今回の野戦戦闘訓練は第一部隊の勝利で幕を閉じ、各班員は事後処理作業を開始しはじめていた。

護は怜奈に連絡を入れ、美翔の居場所を教えてもらい探しに行った。片付けを始めて三時間が経過し、そのころには辺りは闇に包まれていた。夜になってようやく作業が終わり、司令塔にいる監督者に連絡を入れた。

「今夜は夜も遅いし、今日は川岸で野営してくれ。基地の方には俺の方で話をつけておく」

との、なんともありがたい申し出を受けた。

そうこうしているうちに気絶していた健は目を覚まし

「勝負は…どう…なった？」

と巳波に聞いた。

巳波が無意識に健の手の甲の上に自分の手をのせ、優しく握り締め
「激しい戦闘だったわね。でも、さすがは橋本班長。今回は負けて
しまいました」

と、少しばかり遠回しな言葉を選び怜奈は健に告げた。

巳波に戦闘の結果を言われながら周りを見渡す。そこに護がない
ことに気がついた

「護がいらないだが、何処に行っただんだ」

「美翔さんがちよつと…」

「そういえば最後の方、何か叫び声がしたと思っただらそういうこと
か。まあ、あいつも子供じやないんだしなんとかなるか」

健は少し上体を起こし、後ろにあつた岩に体を預ける。

巳波は甲斐甲斐しくも健を助けていた。

「この勝負最高だったぜ！」

と少し笑いながら橋本班長が近づいてきた。

「また、そのうち班長に挑みますよ！」

健はすこし拳を握りしめてその手を班長の方に向けながら、言った。

「ああ、いつでも来い、受けて立ってやる！」

「それより、巳波…いつまで俺の手…握ってるんだ？」

少し赤くなり頬を掻きながら健は言った。

「えっ、あつ、す、すいません、気がつかなくて」

バツと、手を離しアタフタとして頬を紅潮させ、赤くなった顔を冷
ますかのように巳波は手で仰ぐ。

周りのみんなは巳波のお茶目な一面を見て「巳波のやつかわいいな」
皆が、笑った。

「ったく、健が羨ましいぜ」

と、坂井が小さく言った。その声を聞いた人はいなかった。

健が少し無理して起き上がり

「まあ、いいよ。何か元気が出てきたよ」と、左手で頭を撫でた。

「こんな私でも役に立てて…うれしいです」

巳波は瞳をウルウルさせながら両手を胸の前で組み、まるで何かに祈るように呟いた。

そして食事を済ませ、全員睡眠についた。

時を遡ること一時間

護は巳波に連れられて舞のもとへ向かった。少し行くと、木の陰に隠れていた舞を見つけた。………一人で泣いていた。

「ここから先は、ひとりでも大丈夫ですか」

巳波は上目づかいで護に聞く。

「ああ、大丈夫」

護は巳波に「ありがとう」と、告げ足音をたてないように舞に近づいていく。

「美翔」

「うるさい！」

舞は護の言葉を大声で遮る。

「ねえ、どうして…どうして止めたの？」

舞は護の胸に飛び込む。そして、護の胸板を何度も何度も叩き泣きながら聞いた。

「それは…あの時、無理に止めにはいりに行っていたらどうなっていたかなんてわかんなかったし…気がついたら、お前の手を掴んで止めてた」

護は両腕で舞を包むようにして、ゆっくりと、自分の言葉をかみしめるように伝えた。

「えっ？」

「何かおかしいこと…言ったかな」

「な、なんでも…ないわよ。もういい」

そういうと、舞は護の腕の中にいることに気づき護を突き飛ばし、ブイツと後ろに振り向いた。

しばらくしてから両手を後ろで組み、

「ちよつと…いい…かな？」

と少し緊張しながら言った。

「あのさ…私が泣いていたこと…誰にも言わない？」

「言わないよ。まあ、それに、なんて言うか…さっきの泣いてる顔、結構可愛かったぞ」

美翔は顔を真っ赤し、護に向かって殴りかかろうとした。しかし、訓練での疲れが出てしまい足がもつれ、もう一度護の胸の中に収まってしまう。

「まったく世話が焼ける奴だな」

「ごめん、その…ありがとう」

「フツ、意外と素直なところあるんだな」

「意外とはなによ、意外とは！まあなに、この際あなただけに言っておくけど、私は普段、強がり得意で張りなところはあんだけどね、ホント言うよね…素直で優しい性格なんだけど…」

顔を下に向け、頬を紅潮させながら言った

「なんだけどって、…その続きは？」

「男の子いつも張りあうようになっちゃって、いつの間にか意地を張って強がって、自分でもどうしようもなくなってたの」

泣きながら言う。

「素直なところはいい事だぜ」

「何だか、思いつき泣いたら疲れて…きちゃ…った」

舞はゆっくりと、護の腕の中で崩れ落ちていく。

「訓練の疲れとさっきので、寝ちまいやがった…か」

護は少し嬉しそうに一言呟くと、舞をそのままお姫様だっこして川

辺に足を進める。川辺に戻っている最中に、腕の中の舞は小声で「護の馬鹿」と言っていた。

「なんだ、寝言か」

護は少し嬉しそうに呟く。その腕の中で寝ている女の子に胸をときまかせながら。

川辺のキャンプ地に戻ると、そこには橋本班長と兄貴が横になりながら護と舞の帰りを待っていた。橋本班長が声をかけてくる。

「よう」

「もう、平気ですか？」

「ああ」

橋本班長はニイと笑ってみせてくれた

「やつと帰ってきたな、護。二人で一体何の話していた」

「静かにしろよ、兄貴。美翔が起きるからさ」

彼女をゆっくりと、草むらに敷いてあつた寝袋に寝かす。

「二人の勝負の話だよ」

「何か悪いことしちゃったかな」

健はバツの悪そうにつぶやく。

「いいや、それより少し気になったことがあって・・・」

「気になったこと？」

「もし、あの時誰かが止めに入っていたらどうなっていましたか？」
護は思わず班長に聞いていた。

「わかんねえけど、多分俺がなにかしら手出していたかもしれねえ」

「よかったです。あの時、止めに入って」

橋本班長の返事にホッとし胸をなでおろした。

「おれ、全力でやったのに全然歯が立たなかった」

そんな班長に兄貴は悔しそうに言った。

「そりゃそうだろ。オレはそれなりの場数を踏んでいるからな。当然だ！」

「今回はいろいろと課題も見えたし、良い経験もできました」

「そうだな、兄貴。」

「まあ、こういう訓練はただ単に戦闘としての経験を積むだけではなく、その人の目に見えないものもあるからな・・・」

橋本班長は奇麗に話をまとめに入る。

「まあ、話はこれぐらいにして寝るか」

「そうっすね。寝ましょう」

「疲れちまいましたよ、俺」

そして三人は床についた。

夜が明けて皆が起き川水で顔を洗い朝食を食べたのち、輸送車に乗り込む。

「みんないるか？」

監督者が班長に最終確認をした。

「先ほど、点呼を取り全員います」

「そうか、では出発する」

輸送車は基地に向かって走り始めた。

S t a g e 1 - 1 出 会 い（後書き）

初めての本編アップです。

至らぬところばかりですが、こういったところに乗せている限りは精一杯がんばりますので応援お願いします。

感想等ありましたら気兼ねなく書き込んでください。

野外戦闘訓練が終わり第三格納庫に着いたのは正午ごろであった。諜報・情報班班員の監督者の号令で強襲班班員は輸送車から降り二列に整列した。

訓練で負傷した威玖摩建は護の肩を借りて最後尾に整列をする。

監督者は5分間くらい総評を述べ締めくくる。

「負傷者はいたものの、よく頑張った。この経験を大事にしろ、いな！」

「はい！」

班員たちは一斉に言った

「以上、解散」

監督者はそういうと、格納庫から出ていく。強襲班の面々はその後ろ姿を見送る。

「それじゃ、解散にするか」

橋本班長の一言で解散になり、班員たちはそれぞれの部屋に戻って行く。

建は護の肩を借りながら軍専用の病院に向かい巳波も二人の姿を見るとすぐに後を追っていった。

それを見た橋本班長も

「後で見舞いにでも行くか」

と、頭をかきながらつぶやき、それを隣で聞いていた結城副班長も「そうね」

と笑顔で返した。

建、護、巳波は第三格納庫から歩いて三十分かけて基地の東に位置する専用病院に辿り着き院内に入った。

「巳波、兄貴を椅子に座らせてくれないか？俺は受付に行ってくる」「ええ、わかりました」

そう言うのと護は建を巳波に任せて、受付に行き事情を説明して診断

の手続きを取った。

巳波は受付から少し離れたところに椅子があつたので健に肩を貸し、座らせに行かせていた。

「建さん椅子に座ってください」

「悪いな、巳波。迷惑かけちまつたかな？」

「謝らなくても、そんなことはないです」

建に顔を近づけ、彼の眼を見ながらそう言った。

健は少し安心したのか

「そ、そうか」

と、言いながら目をつぶった。

そんな時、受付で検査の手続きをしていた護がこちらに近づいてきた。

「兄貴、今日は十五時から軽い検査をしてから明日の九時、もう一度精密検査するってさ、あと病室の方は二三号室だからさ」

「念入りに検査してもらわないといけねえからな。悪いけど、また肩貸してくれないか？」

「わかった。何か困ったことがあったら呼んでくれよな！兄貴」

「私も呼んでくださいよ」

「ああ」

建は頷き、椅子から立ち上がる。

「巳波、橋本班長と結城副班長に知らせてきてくれないかな？俺は兄貴を病室まで運んで行くからさ」

護はそう言い残すと、病院から出ていく。

「お安いご用です」

そんな護の後ろから巳波は笑顔で返した。

健を病室へ連れて行き、用が済んだ巳波は、一度帰宅することにした。

兵舎へ向かうと二〇三号室の自動ドアを出でて、エレベーターホ

ールに向かい小走りに走っていく。通路を進みエレベーターに乗り込む。一階のボタンを押しエレベーターが動き出すと、体にかかるのを感じる。

病院を飛び出し兵舎に向かい駆けていく。

そこそこの速度で走っていた南は第一格納庫の角に差し掛かった。スピードを落としていなかった巳波は通路を曲がった瞬間、何かにぶつかってしまい尻もちをつき倒れてしまった。

巳波はゆっくり目を開け、それから顔を見上げ、最初は太陽と被って見えなかった。

目を細め、左手で太陽光を遮りよく見てみると、そこには橋本班長と結城副班長の姿があった。

巳波は角を曲がる際に橋本さんの胸にぶつかり倒れてしまったのだ。橋本さんは巳波に駆け寄り声をかけた

「痛てて、ケガとかないか？巳波」

「え、あ、はい、大丈夫です」

頭が少し真っ白になっており、座ったまますぐに謝る。

「班長、さっきはぶつかってしまい、すいませんでした！」

「まあいいよ、それよりあいつの方はどうなった」

「あいつ？」

頭を傾げながら聞き返す。

「健のことだよ」

慌てて要件を思い出し、一呼吸してから

「健さんは、今日の十五時から軽い検査をして明日九時から精密検査をするそうです」

と答えた。

「そうか、わかった」

橋本さんが巳波の手を取り彼女を立たせる。

「そうね」

絵梨奈さんが返してくれる。

「お見舞いですか？」

「そのつもりよ」

「健さんの病室は二 三号室です」

「ありがとうね、零菜」

絵梨奈さんは巳波の頭をやさしくなでながらお礼の言葉を述べた。
巳波は「どういたしまして」とうれしそうに目を細める。

軽く頭を下げてから巳波は兵舎へ、橋本さんと絵梨奈さんは健の病室へ向かっていった。

二人は健の病室近くまで行くと、病室から出てくる護の姿が見えたので声をかけた。

「よう、護。健の方はどうだ？」

「橋本さんに結城さん、お疲れ様です。兄貴なら今のところは何かもないと思いますけど、実際検査をしてみないと分かりません」

「そう」

と、絵梨奈さんは少し不安げな顔をする。

「そんな表情するなよ」

橋本さんは絵梨奈さんの背中を軽くたたいて元気づけた。

「そうね、まあ健が死ぬわけがないわよね」

絵梨奈さんの顔に笑顔が戻り、護は「用事が終わった」と兵舎に向かい病院を後にした。

橋本さんと絵梨奈さんはノックをして病室に入る。

個室のベッドで横になっている健を見た。

健は二人の姿を見て

「橋本さん、結城さん、どうしてここにいますか？」

と、疑問をそのまま言葉にする。

「どうしてって、見舞いだよ」

橋本さんが「しかたなく」と付け足して言った。

「そうっすか、ありがとうございます」

「元気そうで何よりね、フッフ」

結城さんがうれしそうにつぶやく。

橋本さんと絵梨奈さんが病室に入ってから五分もたたずに

「こいつの元気な姿も見たし、俺は帰る」と言って病室から出て行くようにする。

健は橋本さん呼び止め、自分のESPの電流念動力エレキネシスで橋本さんの肩を叩きながら

「班長！見舞いに来て何かお土産とかないんですか？」
と、身も蓋もないことを聞く。

「そんなもん持ってきてねえよ！」

橋本さんは笑顔で拳を握り締め、健を殴ろうとしたが

「落ち着きなさいよ、橋本班長」

と、結城さんが止めに入り橋本さんを落ち着かせてから

「また、ここに来るわ」

そう言い残し二人で部屋を出て行った。

四人の来客の対応に気を取られ、気がつけば時刻は昼の一時半になっていた。

腹が減ったので健は病院内にある食堂へ行こうと、松葉づえをつきながらエレベータのところまで歩いて行く。

一階まで降りて食堂に入って軽く食事を済ませる。この病院はセルフサービスなので食器を洗い場のところまで持って行き、再びエレベータのところに松葉づえをついて歩いていき二階について自分の病室に戻った。

再び時計を見ると午後二時半を指していた。

検査が始まる十五分前に医師と看護師三人が入ってきた。

今からやる検査内容と明日の精密検査の内容と注意事項説明してもらい、三時過ぎに検査が始まった。

その検査は三十分ぐらいで終わった。

結果のほうは検査が終わってからすぐに出てきたので、医師からは「全身打撲と肋骨に六本ひびが入っています。それから明日もう一度精密検査をして、脳など重要な個所に異常がないかもう一度詳し

く調べます。それと、絶対安静にしておくこと！分かったかね、威玖摩君」と、くぎを刺された。

「はい、分りました」

健は元氣よく返事をしたのを見た医師と看護師二人は検査室から出て行った。

健も検査室から出て行こうとしたとき入り口付近に東雲沙希しのめさきという女性が壁に寄りかかっていた。

「大変そうね」

と、声をかけられた彼女は東雲沙希しのめさきという名前で威玖摩兄弟とは知り合いであり兵舎の部屋が隣同士で面識もある。

まれに威玖摩兄弟の様子を見に来て世話を焼いてくれるお姉ちゃん的存在であると同時に、独立治安維持軍（Independent Maintenance-Of-Public-Order Army）I.M.O.P.O.Aの救護班にも所属している。

彼女の髪の色は茶色がかった黒で、いつもポニーテイルをしている。「今日は偶然ね。どうしたらこんな風になるの？」

沙希姉に話しかけられる。

「ああ、それは橋本班長にやられて・・・」

「え、そうなの？橋本さんとやり合ってよくこの程度のケガですんだわね」

と驚愕した。

「橋本さんも手加減してくれていたからだと思う・・・」

健は顔を下に向け悲しげな顔してつぶやいた。

「ふーん、そうなんだ」

「ふーんって、それだけかよ」

健は少し怒ったふりをしながら言い返してみる。

「もっと優しい言葉の方がよかったかな？」

「いいや…何でも」

が、毛ほども敵わずに、少し引き下がったのであった。

「フフツ、彼に負けないくらいもっと頑張りなさいよ」

と、笑いながら肩を叩いてきた。

健は「ぐほっ」っと、言い倒れた。

「あ、ごめん、ごめん。あんたケガ人だっということ忘れてた」と、恐ろしいことを口走りながら、笑いながら謝ってくれる。

「沙希姉、もうちょつと患者を労ろうつて心掛けはないのか!？」

大声で怒鳴ったけど肋骨の痛みが出てきて手で押さえたのであった。沙希はすぐに椅子に座らせ痛みが引くのを一緒に待っていてくれた。五分ぐらいしたら痛みが引き沙希と一緒に病室へ戻って行った。

沙希は健をベッドに座らしてくれた。

「後は自分でできるからさ、大丈夫だよ」

と、健は沙希に言った。

「あらそう、無理してない？」

「べ、べつに無理してねえつつうの」

冷やかし半分慈しみ半分の視線が恥ずかしくなり、目をそらし言い返す。

「あんたってからかうと面白いのよね」

沙希は正直に言ってから病室を後にした。

沙希が病室を出て行き健は横になりゆつくりしていると、

「健、大丈夫か？」

と、不意に病室のドアが開き、聞きなれた声が病室に入ってきた。

そいつは藤木直樹ふじきなおきというやつで威玖摩兄弟とは幼なじみであり良き好敵手ライバルでもある。

彼は狙撃班に所属しており魔界人と人間のハーフである。

髪の色は金髪で髪型はいつもオールバックにしている。

「あ、直樹、どうしてこんなところにいるんだ？」

「護から聞いてきた。『兄貴が入院してる』って連絡が来たからさ、それでお前の見舞いにきたんだよ」

「あっそ、見舞いに来てくれてありがとうな、直樹」

「お礼はいいからさ、お見舞いの品、一応持ってきたけど・・・ど

ここに置いたらいいかな？」

直樹は紙袋を掲げながら聞いてきた。

「その小さなタンスの上に置いといてくれ。それでさ、その中身はなんだ？」

と、健が聞く。

「お前が読みたかったマンガを貸しにここまで持ってきたんだよ！ありがたく思え。……それより、体の方はどんな感じなんだ？」

「肋骨に六本ほどひびが入ってるって、あと全身打撲だつてさ」

「よかったな、かの『灼熱の虐殺者』^{グレート・メツェライ}相手にそれだけのケガで」

「班長も、多分手加減してくれてたんだと思う」

直樹はうつむきながら左腕を頭の上に乗せてくる。

「そう……なんだ」

「まあ、お前が気にするなよ！直樹」

「お前も頑張れよ。狙撃班の班長つて化け物なんだろ？」

「鍋谷さんはマジでやばい。あの人に狙われたら、一卷の終わり」

「……へー。どこの班にも居るんだな。化け物つて」

「というか、あの世代は特別だろ？お前の所の班長の橋本さんは強襲班始まつての天才つて言われてるしな。強襲班に12歳で入隊し、今までに5回テロを単独で13回強襲班で解決しているって話も聞く。次期治安維持軍総司令の呼び声が高くて、開祖四家のすべての家から養子に來いと申し出を受けている、が全て断つているつてもつぱらの噂だしな。俺らの班長の鍋谷さんは絶対狙撃殺傷領域^{キルレンジ}が5kmの化け物だろ。俺は『18・0mm四十四式特別狙撃銃』^{キルレンジ}使つて絶対狙撃殺傷領域^{キルレンジ}がやつと1kmだぜ？しかも班長は絶対狙撃殺傷領域^{キルレンジ}が驚異的過ぎるから、参謀部は班長専用の『18・0mm四十四式特別狙撃銃 狙撃班班長仕様』つてのを作らせたらしい。狙撃班最高の『鷹の目』の称号を受け継いでるし……48時間狙撃姿勢を維持することができるんだ。」

「……っへー。やばいな」

「だろ？他には・・・参謀部情報統括者の小西参謀情報官。人心掌握術にたけた超エリートだろ。戦いをチェスに例えるのが好きって話をよく聞くな。あとは、諜報・情報班班長の西原さん。森羅万象あらゆる情報に精通しており博識って話し、どうやらマジらしい。班長なのに潜入・工作もするためレジスタンスからは『アイシ隻眼・ユートベルの天災』って呼ばれているしな。それに作戦の立案から実行、中止の指揮権を参謀部から預かっているっていうし・・・俺たち、自信なくすよな」

「・・・いや、がんばろうぜ」

「ああ、お前もな」

超人的な上官の話や、愚痴を楽しげに話してから直樹は部屋を出ていった。

日が落ちて夕飯を食べ終わり直樹の漫画を読んでいると、あつという間に就寝の時間になり眠った。

翌朝七時に起床すると、朝食が運び込まれてきた。

朝食を食べ終わり、精密検査まで時間がまだあったので昨日読んだ漫画の続きを読んでいた。

そして、時間が来て精密検査が始まった。

今回は昨日より念入りに検査をしてもらった結果、思ったより時間がかかり、二時間を要した。

「この結果が出るまでにはどのぐらいかかりますか？」

「そうですね、検査結果が出るまでに五時間ぐらいかかります。午後四時ぐらいにはわかるかと・・・」

直樹から貸してもらった漫画は全巻の半分読み終わり昼ご飯を食べるから残りを勢いよく読んでいく。

気がつけば午後三時半になっていた。

「検査結果が出るまでまで後三十分か・・・」

健は深いため息をつき再び漫画に手を伸ばす。

三十分後、医者は健の病室を訪れた。

ベッドの前まで来ると、検査結果を言ってくれた

「威玖摩さん、あなたの体に異常は見つかりませんでした。何ともなかったですよ。でも、まだ絶対安静なので退院しても絶対に無理してはいけませんよ。分かりましたか？」

医者は念を押してくる。

「そのぐらいのことは分かっていますよ」

医者から検査結果を聴くとすぐに、病院内の公衆電話から連絡をいれる。

退院の準備が終わり、病室から出ると、護と橋本さんが待っていた。

「よう！結果の方はどうだった？」

橋本さんが話してきた。

「何ともなかったです！」

健は元気よく返事をしてから護は

「さあ、帰りましょうか？」

と、健の手荷物を強引に奪い、サクサクと歩き始めた。

三人は各部屋に帰って行き、健は橋本さんに四週間ほど休暇申請を提出し、橋本さんはこれを受理した。

健はその期間三日に一回通院しており、ヒビが完治し軍に復帰した。健は最初軽い運動をしながら徐々に体力や筋力を取り戻していき一カ月半ほどで筋力と体力は元通りに戻っていたのであった・・・

訓練が終わってから三日後のこと

零菜と舞と絵梨奈そして橋本班長の四人で買い物に来ていた。

時を遡ること前日の夜…

強襲班副班長の絵梨奈さんが部屋でゆっくりしている美翔と巳波の部屋を訪れた。

二人は結城副班長を歓迎し、いろいろな話をしていると、副班長が急に聞いてきた。

「舞ちゃん、零菜ちゃん明日空いてる？」

「急にどうしたんですか？絵梨奈さん」

美翔が聞き返す。

「明日、買い物一緒にいかない？」

「「買い物！？」」

二人のハモツた声が部屋に響いた。

「でも、どうして…私たちなんですか？絵梨奈さん」

巳波がもつと詳しくと聞きかえす。

「理由は特にないけど、この三人で行こうかなって思ってね」

「私は、明日暇なんで行きたいです」

と、舞は賛同した。

巳波もこれに賛同だったので、

「私も舞と一緒にです」

と、追従した。

「それじゃ決まりね。明日、朝の九時に基地の正門に集合ね」

「「はい、分かりました」」

二人は元気よく返事をして、その日はいつもより早めにベッドに入って眠りに就いた

翌朝、日が昇り二人はいつもより早く目を覚ますと、ベッドから這い出し、まっ先に顔を洗う。

軍服から普段着に着替えて朝食を食べてから二人は支度を始めた。

ちなみにI・M・O・P・O・Aはいつ何時テロリストが活動するかわからないため、軍服の配給が5着あり、1着は寝間着と定められていた。

就寝時間にもし、テロ活動が行われた場合は、その寝間着をそのまま軍服として身支度を整えることができるのは大きなメリットと、皆は感じていた。

準備が整い正門に向かう。集合場所まで二十分ぐらいかかるので八時半過ぎには二人は部屋を出た。

基地の中に兵舎があり、それは全部で三十棟あり五階建てである。巴波と美翔は第十棟の三階の同じ部屋に住んでいる。

兵舎は基本的には班長以上でなければルームシェア方式を採用している。

入口に向かうには輸送車用格納庫前を通り越さなければならない。時間がかち合えば、輸送車の出入りで10分は足止めを食らう可能性はある。

が、舞と零菜は無事に通り過ぎ基地の正門に到着した。

そこにはすでに絵梨奈さんが到着していた。

「絵梨奈さん、もう付いていたんですか？」

舞が手を振りながら尋ねる。

「今さっきね。時間は少し早いけどそれじゃ行きましようか？」

絵梨奈さんは踵を返し基地を出る。

「ここからどうやって行くんですか？」

ふと、零菜は聞いた。

「昨日のうちにこの基地にある車一台借りてきたから大丈夫よ。それじゃ、気を取り直して行きましょう」

3人は基地の外にある、専用駐車場に足を踏み入れ、車に乗り込んだ。

十分後デパートにつき駐車場に車をいれた。

すぐに、現在位置を確認して早速三階の服売り場に行き、ウインドウショッピングを楽しむ。

I・M・O・P・O・Aでは衣食住すべてただで、給与は全て貯蓄

できるため3人はある程度の金銭的余裕がある。
三人はそれぞれ五着ずつ服を選び買っていた。

靴売り場に向かっている時、偶然にその靴売り場の前に橋本さんの姿が見つけ絵梨奈さんが話しかけた。

「橋本さんどうして、ここにいますか？」

「丁度靴を二、三足ほど買っておこうかなって思ってた。それで、お前はなんでここにいるんだ？」

と、聞き返される。

「それはね、この子達と一緒に買い物をしにきたのよ。ねえ、橋本さん」

「何だ？」

「よかつたら一緒に回ってもらってもいいですか？」

絵里奈の拒絶不可能の笑みを真正面から受けた橋本班长は「俺の荷物はこれだけだし、まあいいぜ」と、頷いた。

「ありがとうございます、班长」

と、橋本さんの右腕を抱きしめた。

橋本さんは急にこんなことをされたので頭の中は真っ白になり、その場で崩れそうになったところを、舞と零菜は止めに入った。

少し呆けたままの橋本班长の回復を待ち、この四人で回ることになつたであつた。

女子の三人はそのあと色々と買い物を通し、その荷物はというとみんなの分を橋本さん一人が受け持った。

なぜ、一人で皆の荷物を持っていたかという点、副班长である絵梨奈さんが

「ジャンケンで負けてしまった人が荷物を運ぶっていうことしない？」などと、のた打ち回りだし、それに巳波と、美翔が面白半分に参加した。が、橋本さんだけが「そんなガキみたいなことやつてられるかよ！」と、少し怒り気味で言ったが、ここでは絵里奈さんが上手だった。

「ふーん、それでもテロリストから灼熱の虐殺者と恐れられている人が逃げるんですか？」

と絵梨奈は挑発し、橋本班長は

「わかったわい。やっтар！」

と、その挑発にのってしまった。

四人でジャンケンをした結果、ただ一人橋本さんだけが負けてしまい女子三人組はというと

「っ「やったー」」

と叫びながら喜んでいた。

班長はみんなの荷物を運んでいる時に

「くそー、何で俺が負けるんだよ」

と小声でブツブツ文句を言っており後ろで何か言っているのを巳波は微かに聞こえていたらしい。

「迷惑かけてすいません、橋本さん」

巳波は申し訳なさそうに謝った。それを見た班長は

「いやいや、お前が気にすることないって」

と、優しくにそう言った。

「いい気になって・・・もう」

そんな二人のやり取りを少し離れた所から見ていた絵梨奈がつぶやく。

そんなやり取りをしているうちに、次の目的地に着いた。

そこは『エアホーレン』と言う名前のケーキ屋で、店に入る前に

「あの、絵梨奈さんこの店ってケーキがピカイチおいしい店で、しかも予約もなかなか取れない有名なあの店ですよね？」

と、舞が目キラキラを煌めかせ、聞く。

「ええ、そうよ。わたし、この店にずっと来たくてね。舞ちゃんの言うとおり最初はなかなか予約がとれなかったのよ！でもね、たまたま一昨日電話したらね、偶然にもキャンセル予約があるって聞いたから明後日の十二時に急いで予約を取ったのよ、それで一人じゃ

さみしいからあなたたちを誘ったの！」

絵梨奈さんは多少興奮気味にまくしたてた。

「まあまあ、落ち着いてくださいよ」

零菜は絵梨奈さんの肩を軽くたき、店の中に入っていく。受付で話してから女性たちから先に椅子に座っていく。

橋本さんは最後に荷物を下ろして

「あー、もうお前の挑発に乗らねーからな」

と、絵梨奈さんに言ってから席に座った。

「皆は好きなケーキを注文して注文して、ここは私がもつから」

絵梨奈は胸をドンと叩き、二人に言う。

零菜は甘栗入チョコレートケーキとコーヒーを頼んで

「この甘栗入チョコケーキ美味しいです。なんていうか口に入れた後ホワーンとチョコの甘味が広がってから栗の香ばしさがして美味しいです」

舞はミントの香りアップルパイと紅茶を頼み

「ミントの香りアップルパイを食べて、りんごの甘味ミントの香りが合わさってうまい」

と、二人とも、口々に賞賛の言葉を述べ続けた。

絵梨奈さんはハーブティーと抹茶のショートケーキを頼み

「ここの抹茶のショートケーキは他の店よりおいしい」

と、笑みをこぼす。

橋本さんは普通のイチゴのショートケーキとコーヒーを頼み

「ほかの店のケーキよりうめえな」

と喋りながら昼食を楽しく過ごしたのであった。

そのあと、絵梨奈さんたちは車に戻り、橋本さんは自分のバイクに乗り基地に戻っていった。

その日の夜、参謀部情報統括者・小西^{こにしゅう}邑、操縦班班員・梅村^{ばいむら}将人、と狙撃班班長・鍋谷^{なべたに}大和^{やまと}、と諜報・情報班班長・西原^{にしはら}諒^{りょう}、と強襲班班長・橋本^{はしもと}焦^{しょう}の五人が同期会を開き、バーに飲みに来たのであった。皆基地の兵舎に住んでいるが、集合場所はそのバーの前と決めていた。

各自集合場所に向かっているときに、西原と小西が偶然同じ時間に基地を出たため一緒に行くことにした。

「よう、西原班長。調子はどうだい？」

「小西参謀情報官、調子は絶好調です」

「まったく、やめてくれよ参謀情報官は・・・同期だからさ、普通の呼び方でいいよ」

「はい、わかりました。参謀」

「だーから、その呼び方はやめろって言ってるんだろ！」

西原は笑いながら逃げ出し、小西は怒鳴りながら追いかけているが、集合場所を目指した。

集合場所に一番先に着いた橋本と鍋谷は

バーの入り口に邪魔にならない所で二人は会話をしていた。

「こんな時に同期会か、しんどいな」

鍋谷はつらそうに呟く。

それもそうだろう、狙撃班は3日前から今日まで、訓練で山籠りをしていたのだ。

「こんなこと思いつく奴、誰だろうな？」

夜空を見上げながら、口にくわえていた煙草を手で持ち煙を吐き出す。

「さあ、誰だろうな？おれは今日と明日は暇だったからあんまり気にしてなかったけど、まあいいだろ！そんなこと」

と、言い鍋谷の肩をバンバンと叩いた。

そんな会話をしている時に、遠くのほうから何かギヤーギヤー言い合いながら走ってくる音が聞こえてきたので、二人はその方向へ目

をやる。

とそれは逃げる西原と追う小西の姿だった。

「お、小西参謀情報官と西原だ！」

鍋谷はそう言ってから二人の元へ駆けだす。

橋本はそれを静かに見守った。

「参謀情報官、久しぶりです」

鍋谷はピシッと姿勢を正し、敬礼をする。

「お前までそう呼ぶのか、鍋谷」

「今のは、橋本ですよ」

「そう・・・か。お前までそう呼ぶのか」

小西はその場にうずくまる。

そんな中、遅れてきた梅村が状況を見て「どうしたんだ？」と橋本に尋ねる。

「さあ？おれもよくわからん」

と、笑いながら答えた。

梅村はその隣にいた鍋谷にも尋ねたが返事は同じだった。

少し離れた所から皆のところに近づいてきた西原が事情を説明する。

「実は・・・」

事情が分かった梅村は「そういうことか」と、笑い始めた。

「まあ、まあ、さっきのことは忘れて今日はパーッと飲もうぜ。小

西」

西原はそう言うと、バーに入っていく。

「ああ、そうだな。飲んで忘れるか」

と、機嫌を戻し小西はバーの中に入っていく、橋本、鍋谷、梅村はそれに続いた。

それぞれ席に着き全員ウオッカの水割りを注文した。

酒が進むにつれて、話は次第にI・M・O・P・O・Aの話になっていく。

強襲班の訓練のことを部下から聞いていた西原はそのことを橋本に聞いた。

「あー、あれね」

と、思い出し酒を飲みながら

「最初は威玖摩健っていう奴がいるんだけどさ、こいつは経験そのものの少ないけど仲間のことは結構信じているみたいだし多少手間取った」

と、しゃべり始めた。

「ふーん、それで最後はどうなった？」

続きが気になったのだろうか、鍋谷が聞く。

「最後は、大将同士の直接対決さ。俺と、さっきも言っただけど健って奴とやりあってな、あいつも少しはやるなって思っただよ。結局、俺が勝ったけどな、お前らの方はどうなんだ？」

と、話を振り少し威張った態度で聞いた。

「こっちはこれと言ったネタはねえよ。まあ強いて言うなら班長にこつ酷くしごかれていくくらいかな」

と、梅村は首をすくめて見せる。

「こっちはデスク作業が多いし、しかも会議や情報処理とか結構疲れるし…それに、こう言っただ同期のメンバーで飲むとかは久々だし結構いいな」

と、嬉しげに小西は愚痴を漏らした。

「こっちは久々の単独任務の後に、山籠り。しんどいと思っただよ。強襲班みたいに接近を得意としている人達がいないとやっぱり遣りづらいな・・・」

と、鍋谷は首を鳴らしながらが呟く

「どうしてだ？」

鍋谷の言葉に橋本が尋ねる。

「俺は狙撃手だろ？絶対狙撃殺傷領域が5kmつってもやっぱり、強襲班あつての狙撃班だからな。どうしても接近戦に持ち込まれると余りやりなれてないからどうも苦手なんだよ・・・単独じゃね」

「まあ、そのうち最高の相棒ができるよ」
パートナー

梅村がそう言っただのである。

「こつちもこつちで相当疲れるからこういうのはストレスの発散には丁度いいからな」と、西原はグラスを傾けながら呟いた。

「……あー、何かわかるわ……」

その発言に四人は口を揃えて言った。

「それに俺の所なんか敵の所在情報が入ると諜報員を派遣して、諜報員からの情報を整理し、諜報員が死んだら予備員を手配して、齎された情報から最善の作戦を立案して参謀部に打診して、各班に指示してつて、作戦の指揮権を保有するつても結構な重圧プレッシャーなんだぜ」
西原の発言に小西は頷いていた。

お代を払いバーを後にしてバーを出ると偶然にも健と護がいた。

ほろ酔い状態のまま橋本が駆け寄り

「よう健、護！こんな夜遅くなーにやってんだ？それにケガの方は大丈夫なのか？」とまくしたて、ハイテンションのまま詰め寄った。

「そりや大丈夫ですけど……橋本さん、酒飲んでるんですか？」
健は呆れたように聞く。

「ああ、そうだ。丁度こいつらと一緒に飲んでたところだ」

橋本班長の後ろにはかの有名な班長の面々が並んでいた。

互いに自己紹介をしてからその勢いでカラオケに行き五時間ほど歌いっぱなしで皆喉が枯れるくらい歌っていた。

次の日、皆は小西参謀の部屋で目覚め鍋谷の大声で皆が起きたのであった。

「んっ、んあ、ここはどこだ？」

手で目を擦りながら周りを見渡すと自分の部屋ではないので

「うおー……、なんじゃこりゃあ！！……っていうか、ここどこ？」

と、梅村が目丸くして言い放った。

その声で皆目が覚め小西参謀以外同じリアクションをしたのであった。

「あ、ここ俺の部屋だわ」

小西はそう言ってから

「え、本^{マシ}気で・・・」

健、護は気を失った。

その後、朝食は小西の部屋で済ませてからシャワーを浴び、それぞれの部屋に戻っていったのであった。

健、護にとってはいい思い出となった。

けれど、皆はカラオケ行ってからその後の記憶が全く無かったのだ。どういった経緯で部屋に入ったのかわからなかったけど皆はあまり気にしなかった。

それから数時間後、

不意に健の携帯が鳴った。

「・・・はい」

「健か？」

「はい。橋本班長如何したんですか？」

「諜報・情報班から緊急招集がかかった」

「今日は休暇ですが・・・」

「テロだ」

Stage 1 - 2 日常の一齣（後書き）

お久しぶりです。

エピソード込みで第三話をアップさせました。

まだまだ至らない処だらけで誤字、脱字あるかと思いますが応援お願いします。

レビュー、感想等の方もお願いします。

若干のキャラ崩壊がありますが、これも僕の味だと思いがちですが容赦ください。

Stage 1 - 3 テロの脅威

「えっ……今、何て……言いました？」

「もう一度言う。テロが発生した」

「……テロの起こった場所はどこですか？」

「テロの起きた場所は欧州同盟領内、フランスのパリにある欧州司令部だ。テロ発生は二時間前。先程救援要請の一報が入ってきた。

諜報・情報班班長が参謀部へ打診し、正式に司令が下りた。

復唱は省略する。我がI・M・O・P・O・A総司令部直属強襲班はこれより救援に向かい、敵テロリストの殲滅の任に就く。出立は三〇分後。遠征の準備の後、第二格納庫に集合せよ。また、貴官ルームメイトの護にもこの事を伝えろ、いいな！」

「了解、準備してすぐ第二格納庫に向かいます」

健は兵舎の廊下で深呼吸して頭の中を整理してから部屋に入った。

健が部屋に入ると、護はリビングでソファに座ってテレビを見てくつろいでいた。

この時、護は何か嫌な予感を感じ取っていたのだろう、顔をしかめ健の方を向く。

健が部屋に入ってきて電話で話していた内容を護に説明し、二人はすぐ準備に取り掛かった。

二人は防弾・防刃アーマーを身につけ、自身の腰に閃光発音手榴弾『七十五式閃光発音手榴弾』を二つ、散束手榴弾『七十四式散束手榴弾』を一つ、レッグホルスターにハンドガン『三十八式9mm拳銃』、腰にナイフ『一式多目的サバイバルナイフ』、胸に各マガジンを五本装備し、肩から短機関銃『六十二式9mm短機関銃』を下げる。

五分もたたない内に準備は終わり、二人は装備を点検しなおし、大急ぎでドアを開け駆け出していた。

二人が部屋を出ると同時に隣の部屋から紗季姉を覗かせる。

「全くそそっかしいんだから、ドアの鍵ぐらい占めていきなさいよ！無事に生きて帰ってきなさいね」

二人はその言葉を背中に受けながらドアを閉めた。

二人が第二格納庫に着いた時には既に救援に向かう各班の班員で混雑していた。

その人ごみを避けながら橋本班長を探していた。
混雑の中ようやく班長を見つけて声をかけた

「橋本班長！！」

「着いたか、第二滑走路にあるあの輸送機に乗りこめ」
健と護は班長が指さした輸送機に素早く乗りこみ、空いてる席に座る。

少し遅れてから橋本班長も駆け足で乗りこみ、扉を占めた。

「強襲班総員搭乗。離陸しろ！梅村」

「了解。コントロール、こちらJ A O O 1 8 7 4これより離陸する。
お前ら、さっさとベルト閉めろ！」

輸送機が欧州支部に向けて第二滑走路から飛び立とうとした時に第五、第六滑走路に別の輸送機が着陸するのが見えた。

健は『フランスから出迎えにでも来たのかな』と思っていた。

輸送機が離陸し、欧州司令部へ向かっている最中、橋本班長が席から立ち今入っている情報を班員たちに説明した。

「よし、みんな静かにしてよく聞いてくれ！今入っている情報をみんなに伝える。諜報・情報班からの情報によると司令部に立てこもっているテロリストとの連絡は取れて交渉もしているらしい！が、現在司令部の中がどういう状況になっているのか、テロリストの人数も所持している武器、目的は不明ということだ。具体的な情報や作戦などは向こうに着いてからだ。みんな、心からしかかれ、い

いな！」

「『はい』」

一斉に声を揃え、健たちは自己流の精神統一を始める。

班長はコックピットのところまで行き

「なあ、梅村フランスまでどのぐらいかかるんだ」

「このスピードなら約二時間ってとこだな」

「そんなにもかかるのか…」

「そうだ。言い忘れるところだったよ」

「なんだ？」

「西原班長と部下の那奈北^{ななくる}響^{きょう}は先に付いたみたいだぜ」

「どうしてあの二人が？」

「具体的な予定までは知らねえけど、欧州支部強襲班の訓練の視察を見に行っていたって言う情報が俺の耳に入ってきてな」

『そういえばこいつ諜報・情報班にも関わりを持っていたな』心の
中で呟き

「そうか、わかった。サンキュー助かったよ」

班長は梅村に礼を言い、自分の席に戻った。

それから二時間後、パリにある空港上空に着いたときは日本との時差により太陽は真上に登っていたのであった。

「こちらI・M・O・P・O・A日本総司令部直轄軍専用機JA001874、コントロール、応答せよ」

梅村はインカムのマイクをONにし、パリ空港の管制塔に無線を入れる。

『こちらパリコントロール。JA01874どうぞ』

「欧州支部司令部からの救援要請を受けている。早急に現地に入りたい。最寄りのランウェイを指示してくれ」

『了解、第一滑走路を使用してください』

梅村は管制塔に連絡を取り着陸の許可がでて、第一滑走路に着陸させた。

最寄りのターミナルへ誘導されるまま数百メートル走らせ、カーゴハッチを開く。

強襲班の面々は輸送機がようやく止まりカーゴハッチが開くのを待つ。ハッチが開き降りた先には軍人と輸送車が止まっていた。

橋本班長はその人たち敬礼する。

「I・M・O・P・O・A日本総司令部直轄強襲班班長橋本です」

「欧州支部警備班班長ジョエル・ゾエです。ようこそ、『灼熱の虐殺者』^{ト・メッエライ}。どうぞこちらへ。前線司令部の仮設テントまでお送りします」

「総員搭乗」

橋本班長の号令で強襲班の面々は輸送車に乗っていく。

「早くしろ」

「了解」

班長に続き健、巳波と次々に乗っていく。

そんな様子をコックピットから眺めながら梅村は輸送機の補給を待ち、燃料の補給後日本に向けて再び飛び立った。

欧州支部操縦班の輸送車に乗り込み空港から十分後・・・数キロ離れたところに対策本部が設置されている前線司令部に着いた。

輸送車から降り担当の警備班に案内されるまま着いていく。

そこには旧欧州同盟軍のテントが乱立していた。

その近くに救援要請を受け、既に現着していた日本総司令部の衛生班、通信班のテントが立って、通信班の近くには諜報・情報班の作戦司令部テントが立っていた。

その中に諜報・情報班班長の西原と、参謀部情報統括者の小西が難しい顔をして、作戦の立案をしていた。

「ここをこう攻めれば！」

「違う、ここをこうだ！」

「それより人質の交換を先に・・・」

言い争っている声が聞こえてきた。

強襲班のテントに着き、その場は結城副班長に預け、橋本班長はすぐに諜報・情報班のテントに向かって行く。

班長は現状の確認と、今後の作戦を聞きに行ったのである。

「西原班長、現在の状況はどうなっていますか？」

「先ほど前線司令部の通信システムにテロリストたちのほうから連絡が入ってきた。三〇名ほど人質に取られている。数時間前、欧州支部が独断で強襲班に突入命令を下してしまった。俺たちの許可も無しにな。結果欧州支部強襲班の半数以上が死傷してしまい、救援要請を出す羽目になったんだ・・・それに悪い話で司令部ビルに爆弾が設置されているみたいだ」

「それは本当ですか？」

「確かな情報ではないが、先の突入時にも数か所で爆発音を確認し、強襲班員の死体を確認しているが、抵抗が激しく回収できていない。正直、先の爆発が爆弾なのか、手榴弾の類なのか判断できないんだ。もし、爆弾のトラップならばどれぐらいの数でどこに仕掛けられているか全くわからない」

「クソッ、人質に取られている人達の名前とテロリストたちからの要求は？」

「人質はジベル・クライム首相、この支部司令官であるガネット・キールそれから、欧州支部警備班班員の28人で、内数名が首相と司令官を庇っていくつか銃弾で撃たれて負傷しているみたいだ。要求はヘリを五機と身代金として八千万ユーロだ。今日はフランス首相とこの支部司令官がこの国の今後について話し合う予定だったみたいだ。通信班の方では30人の救出のため必死に交渉をしているが・・・万が一のために、強襲班はいつでも突入できるようにだけ準備をしといてくれ」

「了解。編成は私がしても？」

「任せる！」

西原班長も小西参謀も作戦を立てるのに懸命だったのか、戦況図から顔を上げることがない。橋本班長は敬礼をし、戻って行った。

テント内では・・・

「これってさ、テロなんだろう？」

「ああ、そうだな」

「死ぬの怖いし、不安だ」

「俺も・・・」

そう言った会話がちらほらと聞こえてきたので副班長の絵梨奈さんはその不安感を少しでもなくそうと立ちあがって

「みんな、聞いて！」

みんなは絵梨奈さん方に顔を向け

「皆はこういった地の利の無い実践は初めてだと思います。最初はね・・・誰でも怖いし不安もあるし自分が実践で死んでしまうかもしれないという恐怖心もあると思う！私だっていつ命を落とすかわからないから不安だし怖いです。だからね、何ていうのかな・・・お互い信じ合える仲間がいれば大丈夫だと思うわ。だから、下を向かないで、私たちが見るのは仲間の背中と、テロリストだけよ」

笑顔でそう言って、班員たちからは少し恐怖心や不安感が消えたようだった。

みんなを励ました絵梨奈さんは、その場を後にして別の場所に行く。諜報・情報班のテントから戻ってきた橋本班長は陰で副班長の話を聞き、その後を追いかけていった。

結城副班長はテントの角まで行くと、その場座り込み蹲ってしまう。それを見た橋本班長は近づいていき隣に腰を下ろした。

「結城副班長、泣くなよ。あんたはよく頑張ってくれたじゃないか！みんなの心の中にあつた不安感や恐怖心を俺は少しでも和らげようと思っていたところだけど、お前が俺の代わりにやってくれた・・・ありがとうな！お前が俺のパートナーで本当によかったよ」

「いいえ、これも仕事のうちです」

言った結城副班長だったのだが、急に橋本班長に寄り添い班長の胸の中で大粒の涙を流しながら小声で呟いた。

「班長・・・私・・・怖いです」

「ああ、お前だけじゃない。皆もそうだし・・・俺も怖い、けど信頼できる仲間がいれば大丈夫だと俺は思ってる」

橋本班長はやさしく彼女を抱きしめた。

「班長、ありがとうございます。何だか泣いたら少し安心しました」
そのあと班長と副班長はテントに戻り班員たちに諜報・情報班から仕入れた近況を話した。

「情報では、現在テロリストと交渉を情報班が行っているらしい。
要求はヘリを五機と身代金として八千万ユーロだそうだ」

「八千万ユーロですか」

「ああ、それと、我々が着く前に欧州支部の独断で強襲班が突入作戦を行つたらしいが・・・結果は敗北。班員の半数が爆発に巻き込まれ死傷したらしい。テロリストは至る所に爆発物のトラップを配置していると言っているらしいが、これがそのトラップなのか・・・ただの手榴弾なのか、西原や、小西は判断に困っているらしい。先に言っておくが、支部の中には爆弾が仕掛けられているかもしれない。これは確定情報ではないが、我々は常に最悪を想定して備えるのが常だ。俺たち強襲班は万が一の事態に備え準備しておく。
今回、突入作戦を指示された場合は今から言う4班で突入作戦を行うこととする。」

突入経路は4つ、正面玄関からの第一班。ビル裏口からの第二班、ビル右側からの第三班、ビル左側からの第四班。

正門から突入する第一班班長は俺、以下副班長の結城絵梨奈と海堂駿、杉崎望、沖野五月の五人、

裏口から突入する第二班班長は威玖摩健、以下威玖摩護、美翔舞、

巳波零菜、湯崎魁の五人

右手から突入する第三班班長は豪炎寺隼人、以下長谷川唯、赤月廉、加賀見隆、新田絵里の五人

左手から突入する第四班班長は霧野スバル、以下生島聖智、月影友里、阪井裕也、上澤光一の五人

いいか、この人選は俺が考えうる中で最も成功率の高い布陣、陣形だ。俺を信じる。

西原班長の突入の指示で、俺達第一班が先行しテロリストを陽動する。その後に残りの班は一斉に突撃し、内部をかく乱しろ。諜報・情報班の那奈北ななくる響きょうのESPで内部の人質の居場所だけは確認できている。司令部ビルに11名及び、管制塔内部に19名の計30人の反応を確認したらしい。

狙撃班は既に各人が狙撃ポイントについているらしい。突入時は狙撃班の援護が期待できるが、頼り過ぎるなよ。いいな！」

「了解」

強襲班の面々は『配置に付け』の号令を聞きその場を後にして、すぐにそれぞれ配置につき命令を、突入の指示を待った。

強襲班の各班が配置につき1時間以上が経過した。

「こちら諜報・情報班班長の西原だ。橋本班長、聞こえるか？」

「こちら強襲班班長の橋本、オーバー？」

「お前・・・こんな時にふざけているのか？」

「いいえ、俺はいつでも大真面目です」

「はぁー、冗談はもういい。本題に入る・・・・・・・・今の状況から言うと、交渉が難航している・・・」

「それで俺に愚痴を言うために連絡を？」

「違う！この、諜報・情報班班長である俺と、参謀部の小西の判断で、これ以上の交渉は無意味と結論づけた。よって、諜報・情報班班長として、強襲班に突入を命令する。

大まかな概要だけ言うと、俺たちはこのまま交渉を続け、敵テロリストの注意を逸らす。貴官らはその隙に人質の解放を最優先事項とし、突入を行ってもらう。優先事項から言うと、

1・人質の解放

2・司令部ビル解放

3・敵テロリストの殲滅

そして、何より大切なのは貴官らの中から死者を出さない事。いいか？」

「了解」

橋本班長は西原班長のセリフに背筋が伸びた。

「現時刻23:00を持って作戦を　から　へと、移行する。

強襲班・・・突入」

静かに、しかし確かな声で決定的な、今回の事件を大きく変化させてしまう命令が下る。

「了解」

諜報・情報班班長から命令が下り

「作戦　発令。強襲班突入せよ。繰り返す、作戦　発令、強襲班突入せよ。作戦通り、先発は我が一班。以後、各班も順次突入せよ。いいか、死ぬなよ」

橋本班長は防弾ヘルメット内のインカムに向かって静かに言った。

強襲班第一班は正門を突破した。

欧州支部司令部正面玄関から突入すると、右手にまずトレーニングジムが見えた。

左手の検問所の後ろには大きな、建物が見える。話ではここが兵舎となっていてらしい。地上30階はあるだろう。

その後ろには、食堂棟がたっている。

トレーニングジムの後ろにはひっそりとした建物が視界に入る。ここが弾薬庫らしい。正門正面には5階建ての建物が建っており、ここが司令部ビルだ。

司令部ビルの後ろには第一格納庫と第二格納庫が並列で並んでおり、その右隣に管制塔及びレーダーサイトが建っている。

そして、その奥には四本の滑走路が並んでいた。

橋本班長は、六十三式短機関銃を右手に構え第一班を先導していく。第一班はトレーニングジムの壁に張り付き、光ファイバー境で内部を覗く。

「班長、中には人の気配がありません」

「よし、突入」

班長の号令で、第一班はトレーニングジムへ突入する。

「トレーニングジム、ホールド」

第一班の通信を担当する沖野五月が無線で司令部に報告をした。

「続いて第一班は弾薬庫へ向かいます」

「こちら司令部、了解。これより、残りの班を突入させます」

「了解」

司令部の通信班と交信し、第一班はそのまま、弾薬庫へ向かった。

「こちら司令部、第二、三、四班、突入せよ」

防弾ヘルメット内のインカムから、司令部からの突入指示が出る。

健は、「第二班突入する」と声を上げ、短機関銃を片手に、突入した。

健たち第二班は基地の裏面、つまり滑走路からの突入である。

何も無いさら地みたいな滑走路を五人の人間が走っている。

不意に、管制塔から警報が鳴りだした。

「気付かれたか。想定時間より、13秒早いな」

健は自身の腕時計を確認し、そう呟いた。

「あに・・・班長。どうする？」

「予定では、管制塔をホールドする予定だったが、先に格納庫をホールドしておこう」

「いいのか？かってにそんな判断をして？」

「人質の命がかかっているからな」

「魁、司令部にそう伝えてくれ」

「はいはい、了解です」

魁は、ぼやくと無線で司令部に告げた。

「行くぞ」

健は、右手の銃を握りなおし、格納庫へ向かって走り出した。

健たち第二班は第一、第二格納庫へ、突入し奪還した。

「こちら第二班。第一、第二格納庫、ホールド」

「こちら司令部、了解。第二班はそのまま、司令部ビルをホールドせよ」

「了解」

「こちら第3班、管制塔をホールド。テロリスト7人と戦闘になりましたが、人質の19人をホールドしました」

「こちら司令部、了解」

「ただ、新田絵里及び加賀美隆が負傷。大至急増援願います」

「何分もつ？」

「現状維持であれば、30分は大丈夫です」

「ならば、現状維持しろ。今、そちらに増援は出せない」

「りよ、了解」

健は自分の後の無線を聴き、背中から流れる汗に気付いた。

「健さん、大丈夫ですかね？」

美翔が、不安そうな顔で聞いてくる。

「大丈夫さ。それよりも、俺たちは司令部ビルへ突入するぞ」

「了解」

美翔は頷くと、右手の短機関銃を持ち替えて大きく深呼吸した。

「西原、聞こえるか？」

「・・・なんだ？」

弾薬庫をホールドした橋本班長は無線で諜報・情報班班長である西原班長に無線を入れる。

「何かおかしい気がする」

「どうした？ なにかあったのか？」

「弾薬庫をホールドした。……敵テロリストもいたんだがな、少なすぎる」

「何人だ？」

「2人」

「マジか？ 確かにおかしいな」

「ああ、やばいかもしれない」

「わかった。こっちもできるだけサポートする」

「すまん」

「気にするな……死ぬなよ」

「解ってるよ。生きて帰ったら今度の飲み会はお前と小西のおごりな」

「覚えたらな」

霧野率いる第三班は30階もある欧州支部司令部の兵舎へと突入していた。

「班長、こちら生島、6階までホールド」

兵舎には10を超えるエレベーターが備え付けられている。

霧野は自身のESP『透視』の能力を使い、兵舎の内部をスキャンングした。

兵舎内には敵テロリストの存在を確認できなかった霧野は班員である、生島に1階から6階まで、月影に7階から12階、坂井に13階から18階、上澤に19階から24階、そして自分が25階から30階を担当区域として爆発物等の排除作業を行うことにしたのである。

そして、今生島から6階までの安全確認終了の報告を受けたのだ。

「了解。では、兵舎入り口にて敵テロリストの迎撃任務についてくれ」

「了解」

霧野は生島に兵舎の入り口を任せ、自分の担当区域の安全確認を始

めた。

第二班は司令部ビルの裏口の壁に背を預け、光ファイバー境で内部を観察していた。

「健、少なくともこの先には敵はいないわ」

巳波は光ファイバー境を巻き取り、健に告げる。

「突入するぞ」

巳波の声に反応し、健は突入命令を出した。

「司令部、こちら4班」

「こちら司令部、4班どうした？」

「食堂内に敵テロリスト確認」

「規模は？」

「解らない。すごい数だ」

「了解、気付かれたのか？」

「いや、まだだ」

「ならば、現状を維持しろ。今スグに増援は送れない」

「了解」

健の突入指示と時を同じくして4班と司令部の無線が聞こえてくる。

「他のところもがんばってんだ。俺らも気を引き締めていくぞ」

健は、そう言くと、静かに扉を開いた。

「長谷川、七十五（七十五式閃光発音手榴弾）あるか？」

管制塔で足止めを食らっている、第三班班長豪炎寺は壁に背を預け、姿勢を低くしている。

ただ、姿勢を低くしているわけではない。豪炎寺たちが背中を預けている壁の角が銃弾で削られていく。

銃撃は絶え間なく続いている。元の角より三センチは銃弾で削り取られただろう。

「私は一つも使っていません」

「そうか、次のリロードのタイミングでけりをつけるぞ」

「了解」

「……敵テロリストからの銃撃が止まる。」

「今だ!!」

豪炎寺は叫んだ。

豪炎寺の声に合わせて長谷川が七十五式閃光発音手榴弾を投げ込んだ。

豪炎寺、長谷川、赤月の三人は耳をふさぎ、目を閉じる……などということはない。

防弾ヘルメットのノイズキャンセラーのレベルを最大限まで上げ、バイザーを遮光に切り替えた。

一秒たたずに七十五は炸裂する。

豪炎寺はハンドサインで突入を指示し、二人はそれに頷いた。

豪炎寺は壁の陰から踊りだす。

敵テロリスト七人のうち反撃の行動をとった四人を撃ち殺す。

残りの三人は床に伏せ、両手を頭の上に置いていたのだ。

「司令部、こちら第三班。管制塔をホールド。七名のテロリストのうち三人を拘束しました」

「了解」直ちに救護班を送る」

「急いでくれ」

豪炎寺は敵に撃たれた加賀美と新田の元へ向かった。

司令部ビルに突入した健たち第二班は二手に分かれて、地下の探索と地上部分のたんさくをおこなうことにした。

「俺と、巳波、湯崎は上を、護、美翔は地下を」

健は、班を二つに割ると、自分たちは上階を目指すことにし、護、美翔に地下を任せることにした。

「でもよ、あに　班長。二つに分けるのは危険じゃないか？」

「確かに、危険ではあるが・・・もし、テロリストに遭遇した場合は分けている方が都合がいいことの方が多い」

「・・・わかったよ」

「では、行こうか」

健は自分のヘルメットを軽くたたき、2階を目指し、階段に向かった。

地下に降りた護、美翔の二人は地下1階をホールドし、地下2階へ降りて行くところだった。

「美翔、大丈夫か？」

護は美翔を気遣う。

それもそのはずである。地下1階は拷問部屋、2階は牢獄しかないのである。

「だ・・・大丈夫よ」

美翔は軽く背筋を伸ばし、気丈にふるまった。

「そうか？それならいいが」

護は言うと、美翔の前を進む。

護は以前の戦闘訓練の時のこともあり、美翔のことが、気になっているのだった。

二人は地下2階へ降りる、しかしそこは、全くの手つかずな状態でテロリストが仲間を助けに来たわけではないことがうかがえた。

「やつら、いったい何しに来たんだ？」

護はそう呟かずにはいられなかった。

二人と別れて上の階を目指した健たち3人は人の気配を察し、物陰に隠れた。

「3階まではテロリストはいないはずなんだが」

司令部からの報告で司令部ビル内部の3階以上にしか人はいないと報告をされている健は、身構えた。

「・・・た、助けてください」

その人の気配が大きくなっていく。健は短機関銃を構え、物陰から飛び出した。

そこには肩を震わせながら肩から服をはおった女性が近づいてきていた。

「大丈夫ですか？」

その女性に真っ先に反応したのは湯崎だった。

湯崎はダツと飛び出すと、女性に駆け寄る。

女性は首を横に振り、「助けて」と言い、自分の服をたくしあげた。そこには、液体の入ったガラスから、コードが伸び・・・爆弾につながっていた。

「湯崎、戻れ！！」

健は大きく叫んだ。

ガラス内の液体がはねた。

ズドォーーーーーン！

女性の体もろとも、湯崎は爆発に巻き込まれたのだ。

「湯崎！」

健は爆発の衝撃から身を守るために一度身を隠した後、湯崎のいた場所へ歩を進めた。

焦げたにおい。肉、肉、肉。あたり一面に人の肉塊が、血液が飛び散っている。

「来るな！」

健は已波に叫ぶ。

「来るな、已波」

もう一度健はそう言うと、その場に膝をついた。

「司令部、こちら第2班」

「こちら司令部、どうした？」

「班員1名死亡。湯崎魁がやられました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・了解、作戦を続行せよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・了解」

護、美翔は地下をホールドし、健たちと合流すべく、上を目指した。
ずズドオーーーーーン！

と、大きな物音が聞こえる。

「今のは？」

「この階から聞こえたな・・・あっちだ」

護は音の聞こえた方へ足を進める。

「兄貴、なんだよこれは？」

合流した護は床に不座をついている健に詰め寄った。

「湯崎がやられた」

健は端的に言くと、大きく深呼吸をして、一度目を閉じた。

「行くぞ！」

健から発せられた声は怒気を孕んでいた。

3階上がり、テロリストを見つけた。

「貴様」

健は、怒鳴るように、銃を撃ち始める。

「健さん、落ち着いて」

美翔が健に詰め寄り、銃をテロリストに構えたまま、健に語りかける。
「は、はい。」

「巳波！」

「司令部に連絡をしておけ」

「りよ、了解。こちら第二班、テロリストと遭遇、応戦中です」

「こちら司令部、了解」

健のおかげもあり、司令部ビルをホールドすることができるとまで、

5分とかからなかった。

「司令部、こちら第二班司令部ビルをホールド。テロリスト15名を射殺。人質は全員無事に解放しました」

「こちら司令部、了解。第二班はこのまま、食堂棟へ向かってください」

「食堂棟ですか？」

「はい、敵テロリストの首謀と思われる人物を確認できました。現在第4班の増援要請を受け、第1班、3班が向かっています」

「了解、これより向かいます」

健はそう言つと、3人に目くばせをした。

「さーて、食堂の方は・・・見つけ！こちら橋本、食堂の二階にリーダーと思われる人物と部下十数名発見それと・・・おい、話が違うぞ。ジベル・クライム首相及び、支部司令官ガネット・キールを確認。バイオメトリクス情報サーチ、本人と照合。人質は全員解放したんじゃないのか？」

「そのはずですが」

「「すぐに向かいます」」

各班の班長達が無線越しに言ってくる。

「霧野班、五分ぐらいしたら食堂の入口付近に到着します！」
「了解」

「こちら豪炎寺班、十分ほどかかります」
「了解」

暫くしたら霧野達が来て

「霧野、こつちだ」

と、叫んでいた。

橋本班長たちから合図が見えて近づいてきた。

「霧野たちと合流しました」

「西原班長、次はどうすれば？」

「合流したか、食堂はどんな構造になっている？」

「広さはざっと百平方メートルぐらいで二階建てです。階段は真ん中に一つ、両端の角の方に一つずつあります」

「人質とテロリストたちは？」

「人質は中央左の端に、敵はその付近を徘徊しています」

「そうか」

西原班長は近くにあった椅子に座り、頭を抱えながら考え込み

「恐らくテロリスト（あいつら）も勘づいているだろうな・・・」

心の中でそう思い、近くにいた那奈北は

「班長ここは思い切ってテロリストたちと交戦し、その隙に人質の開放を試してみればよいかと・・・」

「その案は俺もまっ先に浮かんだけれど・・・リスクが余りにも高すぎる」

「班長交渉の方も、もう時間の限界かと思いますが・・・」

通信班の方を目を向けそう言ったのであった。

西原班長も悩んだ末苦渋の決断を下した。

「橋本班長、聞こえてるか」

「バツチリ聞こえてますよ」

「今から二階へ行き、一斉にテロリストとの戦闘及び人質の開放をしろ！テロリストたちはなるべく生け捕りにしろ」

「リスク大きすぎじゃねえか。もし、失敗したらどうするんですか？」

「全責任は俺が取る」

「・・・・・・了解」

橋本班長は無線を切り「なかなか、かつこいいこと言うじゃねえの！西原アイツ」と、呟いた。

食堂棟に着いた豪炎寺たちに作戦内容を説明した。

「豪炎寺たちは右の方から霧野たちは左の方から二階へ、俺たちは真ん中から上へ行く。霧野の班と豪炎寺班は少しばかり囷になって

くれないか？」

「どうしてですか？」

坂井が聞いてきて

「まずは、人質の命の方が優先だからさ。これから、ショーの幕開けだ」

それぞれ配置に着き合図を待った

班長は恐る恐る二階に顔を出し位置を確認してからゴーサインを出した。

テロリストたちは不意をつかれたのか、あっさりと五人ほどやられた。

その直後橋本班長たちもすぐに突入し、班長と副班長はすぐに人質を助けその周りに海堂、杉崎、沖野が囲んでいた。

「首相大丈夫ですか？」

「私たちは大丈夫だけど」

「ガネット・キールが」

首相はそう言って目を閉じる。班長が脈をとったが彼は出血多量で死んでいた。

「早く逃げてください。援護します」

班長が言って

「わかった・・・」

首相は護衛に両端を固められながら逃げていく。

そこからは激しい銃撃戦が始まった。

右から奇襲をかけた霧野たちは、生島と坂井が勢い良く飛び出していく。

三、四人倒したのは良かったもののすぐに頭を撃ち向かれ死亡し、二人の遺体を回収しようとした上澤も右肩と腕にかすり負傷した。

豪炎寺たちの方でも、赤月と加賀美はライバル同士で互いに背中を預け、六人ほど倒したが、同時に弾切れ、ジャムを起こし、二人

同時に死角から心臓をおたれ、死亡した。

「こちら健、十分ぐらいしたら着きます」

橋本班長に連絡が入る。

「多分お前の出番はないと思うぜ」

班長は、左手に持った銃にマガジンを差し替え、インカムに向かっていった。

「俺たちの出番も残しといてくださいよ！」

残り六人ぐらいか。

「お前たち、ちよつと来てくれ」

橋本班長は、自分の近くにいた、絵梨奈に向かって言う、

「残りも六人ぐらいだ！お前たちは俺の援護頼む。俺が片付ける！」
橋本班長はそう言う、再び出ていき、一人ずつ片付けていく。

5人目をやった、に背後から頭に銃を突きつけたのだ。

「これは、これは、かの有名な灼熱グレート・メッスエライの虐殺者じゃないか。外には隻ア眼インの（・）天災様コトベルも居るのかな？」

「ああそうだ！どうしてこんなことをした。貴様は誰なんだ？」

「こちらまいろいろとやることがあつてな」

そんなやり取りを、結城副班長がすぐに気がつき銃を放つ。福井班長の放った球は敵の肩に当たる。テロリストが怯んだその隙に橋本はん著は関節技を決め気絶させたのであった。

「サンキュー」

「どういたしました」

橋本班長がそう言う、振り返ると、同時に彼女の左肩に銃弾が貫通し傷口を押さえ込み、その場にすぐに倒れ込んでしまった。

「クッ」

「絵梨奈！大丈夫か」

慌てて駆け寄り、傷口を抑える。

「ええ、大丈夫です。班長」

橋本班長も少し安心して自分のウエストポーチ型ホルスターかた救

急パックを取り出し、応急処置をしてから周りを見渡した。

「豪炎寺、霧野聞こえるか」

「聞こえます」

「テロリストたちの数も少なくなってきている！ここらで一気に仕掛けるぞ」

「分かりました」

豪炎寺班、霧野班が中央付近に近づいていく。

「うわーーーーー」

霧野たちの方から叫び声が聞こえてきた

「こちら豪炎寺、今の叫び声は何ですか！？」

「わからない」

急いで橋本班長たちが霧野たちのところへ駆け寄ると、そこには霧野たちが血まみれになって転がっていた。

「……なっ……」

「近くに複数の人の影があり」

海堂が叫ぶ。

「貴様誰だ？」

沖野が大声で聞く。

「私の名はオルファデ・カイク。テロの首謀者であり、この『オーブン・ジ・アース』フランス支部のリーダーだ！」

「なんだと！」

その場にいた皆は目を丸くし驚いているその時に、健たちが二階に突入してきた。

「ハア、ハア、ハア、何が起きたんですか」

健は肩で息をしながら聞く。

「あいつが今回の首謀者みたいだ」

「あいつが……」

「油断はするな、痛い目に遭うぞ！」

カイクは部下に「……やれ」短く命じる。

テロリストの生き残りは一斉に襲い掛かり、健と橋本班長は同時に
「みんな、任せた」

と、言い走り出す。

橋本班長と健は敵の部下たちに目もくれずカイクの元へ走った。

「健、わかつてるよな！」

「わかつてますよ、班長」

アイコンタクトを取り、健は橋本班長より先に手を出す。右のスト
レートを当てようとしたが躲される。が、それは単なる罠でその隙
に班長は奴の足を引っ掛けようとしたがジャンプで、かわされてし
まい

「やるな」

「それはどうも」

健は

「空中じゃ何もできやしない」

と言いながらジャンプして鳩尾めがけて殴ろうとしたが相手も空中
で立て直し健のパンチを止めた

「えっ！」

「雑魚が・・・」

鳩尾を殴られ蹲り

「チツ・・・まあいい、本気で逝かせてもらうぜ」

「来い、受けて立つ」

それぞれ構えた。

先にカイクが動く。その後に橋本班長も動き取っ組み合いになり班
長は相手を転ばし、胸ぐらをつかみ何発も顔面に食らわせた。

相手も脇腹めがけ蹴りを入れた。

「あんたのこと見くびっていたよ」

「フッ」

再び殴り合いになり、カイクが倒れ込み左足から何かを取り出し橋
本班長に飛びかかってきた。

橋本班長も光が反射したのが見え『くっ』と言ってよけ頬からは血

が垂れてよく見ると

「ダガ ナイフじゃねえか！」

「ああ、そうだ。俺も万が一の時にいつも備えているんだよ」
刃を舐めながら言ってきた。

「まあ、いい。やってやろうじゃないか！」

お互いに走り出しカイクは顔面めがけて突き刺そうとしたが、それを読んでいたかのように顔を少し右に傾け左脇の間に相手の右腕を挟み込む。

顎にアッパーを食らわせ、さらにもう一発鳩尾に殴り、相手が怯み後ろによろけながら

「ハア、ハア、ハア」

カイクは少し荒い息をしていた。

橋本班長は不意に敵の部下に攻撃を食らってしまい、その隙にカイクはナイフで突き刺してきて、皆は『班長！』と叫ぼうとしたとき相手の死角から健がまあいに入り心臓めがけて腰のナイフを突き立てた。が、カイクはこれを紙一重でかわす、しかし、声を健は呼んでいた。『これはさっきのお返しだ！』叫びながら顔面めがけて蹴りを入れた。

「かはっ」

言って壁にぶつかりあおれ込んだカイクの手を縛り、こいつを立たせて問いただした

「どうしてこんなことをしたんだ・・・」

「どうしてって頼まれたんだよ。ある奴にな・・・」

「ある奴って、誰のことなんだよ？」

「それはな・・・ウツ、カハッ」

心臓を打たれて倒れた。

「・・・」

カイクは倒れ口を動かしていたがすぐに息を引き取った

この支部の司令部ビル屋上から誰かが逃げ去る影が橋本班長と健は見えており追いかけて、健もすぐに追いかけていった。

司令部ビルへ向かって行き手分けして探したがそれらしき気配は無かった。

「チツ・・・くっソー」

健は頭をかきむしり壁を殴った。

「ハア、ハア、ハア、班長いましたか」

「いいや、この屋上からカイクを殺して逃げていった影が見えたのに・・・ちくしょう」

落ち込み急に班長の矛先が健の方に向いた

「人質30人解放の知らせを受けたが、2人解放されていなかった」

「これは極秘事項だが、先ほど西原から連絡があつてな、通信班員2人の死体が発見されたそうだ」

「え？」

「つまり、人質にまぎれたテロリストが2人まんまと逃げだしたということだ」

「本当ですか？」

「ああ。凶器はナイフ。ナイフ痕から、西原は犯人を特定したらしい」

「それは？」

「手配書だ。この、『ウラジーミル・ホフマン』旧ユーラシア連邦軍の軍人だ。今まで行方不明だったのだが・・・」

「テロリストになったんですか？」

「いいや、やつは自分の組織を持っている。『W・I・N・R・>ウイナー< (Worldwide International Network Reconstruction)』という名だ。」

「ウラジーミル・・・ホフマン」

「やつは、この俺直々に引導を渡さなければならぬ相手だ」

「強いんですか？」

「ああ、強い。今のお前なら、20人が束になっても敵わないだろ

う」

「そんなに・・・」

「この話はおいとして、健」

「なんすか？」

「なんすかじゃねえよ！なに鳩尾食らって蹲つとんねん、こらー！」

橋本班長は突然キレて、健は『ヤツバ』と想い顔をゾツとした。

「まあいいわ、基地に戻ってからみっちりトレーニングに付き合つたるからさ、覚え時な！」

「・・・はい」

健は小声で答えた

「フツ、冗談はここまでにしといてさっきは、ありがとっな」

「あー、あの時ですね。俺は大したことはしてませんよ」

「お前が間に入ってきてくれなかったら多分死んでたと思うわ」

「でしようね」

「何が、でしようねだ！こら」

「冗談って言ったのは撤回だ」

「えー」

「おまえが余計なこと言わへんかったらよかったんだよ」

走り回っていたら健はさっきのダメージが出てきたので立ち止まった。

「まったく、無理すんなよ」

橋本班長は言いながら健を担ぎ、二人は食堂へ戻っていった。

中に入って行ったら衛生班がいて治療を行なっていた。

西原班長の姿もあり結城副班長から状況を聞いていた。

後ろから橋本班長と健に近づいてくる気配がしたので二人はすぐに、反応して構えた。

「うわっ！」

少女は驚き

「すいません、脅かしてしまって・・・」

頭を下げた。

「いいよ、気にしなくても・・・まだ戦闘が終わったばかりで体が反応しちゃった」

「それより、おケガの方はないですか？」

「俺はないけど健、お前は・・・」

「おれはかすり傷だけですけど、班長その頬の傷・・・なんですか？」

「あ、忘れてた。前言撤回だ！」

健が先に彼女から手当を受けているとき班長が聞いてきた。

「女性に年を聞くのはちょっと失礼かもしれないけど・・・あんたいくつなんだ？」

「今年で十五になります。それに先月入隊してこの班に配属されました」

「ふーん、そうなんだ。頑張ってるんだな、この年でな・・・」

健が感心していると、

「お前もしっかりせんかい」

橋本さんに頭を叩かれた。

その少女はクスクスと笑い、突然

「いつも姉がお世話になってます」

言ってきた、橋本さんと健が顔を合わせ首を傾げたあとその少女に聞き返してきた

「「姉？」」

「あれ、知っているものかと思って話そうとしていたのにお姉ちゃんたら・・・」

顔に手をやり少ししたため息をついたのち零菜と結城副班長の声がした。

「「おーい、班長、健」」

「あいつら・・・」

班長はその声に反応した

「あ、お姉ちゃん」

「あれ、三香^{みづか}久しぶり」

手を振り

「お前の姉ちゃんって零菜のことか？」

「ええ、そうです。私の名前は巳波三香で巳波零菜の妹です」

班長、健は

「えーーーーー」

驚く二人。

結城副班長はいまいち状況が飲み込めていなかった。

S t a g e 1 - 3 テロの脅威（後書き）

お久しぶりです。本編第4話アップします。

今回は少しがんばってみました。

感想、レビュー等の書き込みの方もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9666x/>

オレがこの世界の救世主！？

2011年12月1日15時52分発行